

被災MAP及びDATA

人的被害 (12/15現在 消防庁発表数値)

▶ 死者数は和歌山県が多く、特に那智勝浦町、新宮市に集中している。

	死者	行方不明者	重傷者	軽傷者
三重県	2	1	5	10
奈良県	14	10	5	1
和歌山県	52	5	5	4
三県合計	68名	16名	15名	15名

住家被害数 (12/15現在 消防庁発表数値)

▶ 全壊・半壊など、住家被害は和歌山県が最も多かった。

	全壊	半壊	一部破損	床上浸水	床下浸水
三重県	81	1,076	70	700	832
奈良県	48	62	15	13	37
和歌山県	239	1,742	90	2,880	3,147
三県合計	368戸	2,880戸	175戸	3,393戸	4,016戸

台風12号による総雨量と出水概要

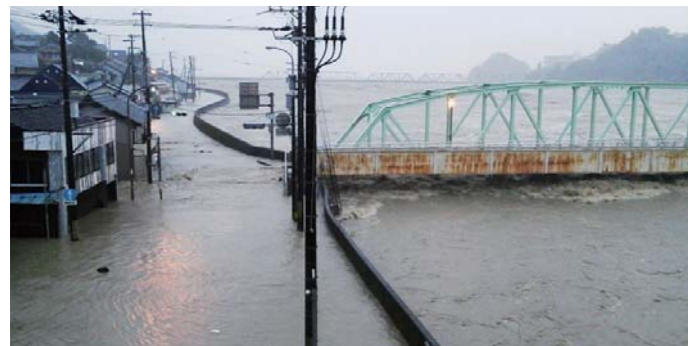
▶ 既往最大の2.1倍、戦後最大の雨量を観測する。

奈良県 上北山村	1,800mm超
奈良県 大台ヶ原	2,400mm超
和歌山県 田辺市熊野	1,300mm超

(熊野川流域)

降雨継続期間	8月31日～9月5日まで(6日間)
総雨量	1,425mm
2日間雨量	1,161mm
熊野川の状況	一部で越水し市街地への浸水被害が発生
野谷川の状況	輪中堤が水没、水位低下時に特殊堤部分が転倒・決壊
浸水被害	熊野川沿で2,552戸、相野谷川沿で649戸の家屋が浸水

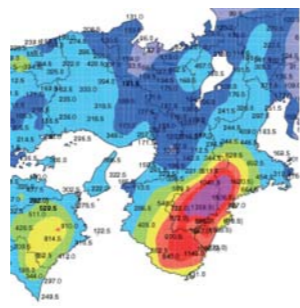
■出水状況の写真 旧熊野川大橋から洪水があふれ出し市内で浸水被害(9月4日6時頃撮影)



資料提供:近畿地方整備局



■台風12号の降雨(出典:気象庁)



資料提供:近畿地方整備局

土砂災害発生件数 (12/31現在 水管理、国土保全局砂防部調べ)

土石流等	59件	地すべり	16件	がけ崩れ	30件	合計	105件
------	-----	------	-----	------	-----	----	------

編集後記

◇昨年の日本は、未曾有の大災害に襲われ、自然の恐ろしさをまざまざと見せつけられた一年でした。その第一のものは、いうまでもなく、死者・行方不明2万人の犠牲を出した「東日本大震災」でした。「想定外」の津波で町全体が消滅するなど、その被害の激しさは、まさにわれわれの想像を絶するものでしたが、その一方で、この震災においては、耐震構造・耐震補強等により大きな被害を免れ、軽微な損傷にとどまった基幹道路や鉄道などが随所にみられました。その意味で、日本中のひとびとが、社会基盤整備、特に防災機能に重点をおいたインフラ整備の大切さを再認識した年であったともいえます。

◇ここ近畿においては、もう一つ大きな災害を忘れてはなりません。それは、台風12号のもたらした「紀伊半島大水害」です。近畿に住むわれわれにとっては、死者・行方不明84人、全・半壊家屋3,200戸、あるいは数百に及ぶ集落の

土砂災害による河道閉塞箇所と規模

- ▶ 崩壊土砂量の総量は、約1億m³に及び豪雨災害としては戦後最大規模。
- ▶ 土砂災害の崩壊規模は、十津川村 栗平地区(奈良県)が最大(1,390万m³)

	崩壊土砂量	高さ	満水湛水量	土砂災害範囲
栗平地区	約1,390万m ³	100m	750万m ³	約950m×650m
赤谷地区	約900万m ³	85m	550万m ³	約1,100m×450m
長殿地区	約680万m ³	80m	270万m ³	約700m×300m
熊野地区	約410万m ³	60m	110万m ³	約450m×650m
北股地区	約120万m ³	25m	4万m ³	約400m×200m

道路被災 (通行止力所)

- ▶ 奈良県・和歌山県内の道路が土砂崩れなどにより至る所で寸断された。
- ▶ 国道168号や国道311号など、国道および県道の通行止めは約200カ所にも及ぶ。

	奈良県	和歌山県	合計
国道	19	44	63カ所
県道	35	106	141カ所
合計	54カ所	150カ所	204カ所



資料提供:近畿地方整備局

孤立、という被害は、あの「阪神大震災」以来最悪のものでした。また、かねてから危惧されていた、近畿の防災整備の立ち遅れ、及び、道路網の脆弱さによる被害の拡大が、望まぬことながらまさに立証されてしまったといえます。

◇われわれ近畿で生活する者は、決してこの「紀伊半島大水害」を記憶から薄れさせてはならない、そういった使命感が、日建連関西支部広報委員を務める私たちに、この臨時増刊の企画・発行を決意させました。われわれは、なぜこのような大きな被害になったのか、また、崩落した紀伊半島の山々はいま、どのように復旧されつつあるのか、を注視し続けなければなりません。そしてなにより大切なことは、これらを踏まえて、近い将来必ず起こる「東南海・南海地震」にどう備えるべきなのか…をいまこそ真剣に考えることです。

小誌が、それらのよすがとなることを、編集委員一同、願って已みません。

平成24年4月